

英語教師としての姿勢 学力の転移を意識した授業

1 はじめに

教師2年目の時、アントレ（茨城英語教師のサークル）に誘ってもらい新英研を知りました。新英研から私は「元気」をもらいました。教師3年目に入り、私は『新英語教育講座』を購入して読みあさり、その中で「寺島の記号」なるものに興味を持ち追試し始めました。この「記号」に代表される『英語記号付け研究会』から私は英語教師としての「姿勢」を学びました。今回はあまりみなさんに良く知られていないであろう記号研についてを中心に私が教師8年間で学んできたことを報告させて頂きたいと思います。

私が記号研から学んだ一番大きなものは、『授業においては2つの指導をしなくてはならない』ということです。2つの指導とは「教科内容の指導」、と「学び方の指導」（学習集団の指導）です。そしてその2つ目の指導には教師団側に「計画力」が不可欠であることに気づかされました。記号研に出会うまでの私は「教材を使って遊ばせるだけの授業」か、「解説をするだけの授業」で精一杯でしたし、それで満足でした。そして生徒が「授業に参加しているかどうか」ということが唯一の自分の授業への私の評価でした。私が記号研に惹かれたのも初めは『便法』つまり、「こうやれば生徒は授業に参加する」という「方法論」の部分でした。理屈はともかく、その「方法」を真似るだけでも、記号研の実践は目に見える違いを生徒達に起こすのです。しかしそれは現在岐阜大教授である寺島隆吉先生が当時勤めていた「定時制高校生相手に生み出した方法だから」ということだけにあるのではなく、その背景に「英語にとって学力とは何か」「英語にとって授業とは何か」という根本の部分がきちんと体系づけられているからだということを忘れてはいけません。とは言っても、残念なことに記号研の会員の中にも授業成立で困っている時だけ形だけ真似、転勤と同時に去ってってしまう人が少なくありません。

富山の中学校の教員である中嶋先生の授業が素晴らしいと言われているのもうなずけます。中嶋先生も自分の中で「英語にとって学力とは何か」「英語にとって授業とは何か」ということを明確に持っています。（英語を通して相手の立場に立って自分の意見を述べることができる子どもを育成するために表現活動の年間計画を立て歌やゲームや自己表現やディベートを使って教える。）そして最初に挙げた「2つ目の指導」も先生の3年間のシラバス（『英語好きにさせる授業マネジメント30の技』105ページ参照）を見るだけで十分に伝わってきます。よく私たちは「その実践は私の学校では使えない」「あなたの学校の生徒は素晴らしい」の一言ですませてしまう場合があります。しかし本当に素晴らしい実践というものの裏にはその一つの実践報告からでは知り得ない「2つ目の指導」（学習集団の指導）が隠れています。そしてその「2つ目の指導」はその教師固有の「英語にとって学力とは何か」「英語にとって授業とは何か」という「教師としての姿勢」に沿って意識的に1コマ1コマの授業の中で行われています。例を挙げれば中嶋先生の段階的な「兄弟ペ

アの指導」(『英語のディベート授業30の技』44 ページ参照)なしで、中嶋先生のすぐ使える技だけを真似ても生徒には同じ学力は付けられないだろうし、あれだけの英語好きの生徒も出てこないだろうということです。たとえその時その時の授業が自分ではうまくいったように思えたとしてもです。

この春休み国語科教育において同じように「国語科にとって授業とは何か」「国語科にとって学力とは何か」を考えて実践を行ってきた大西忠治氏の全集を読む機会を得て、このことを改めて痛感しました。自分の英語教師としての「姿勢」をもう一度再考しようと思いついた良い機会となりました。そして今後の課題である英語学力がつく授業とはどんなものかを整理してみたいと思いました。

2 基本的考えと実践

現在における私の授業をする際の基本的な考えをまとめてみました。その多くが記号研から学んだものであることを今回あらためて感じています。

2-1 見える学力・見えない学力

このことを押さえておかないと授業成立が難しいと思います。テストの点などで表わせる目に見える学力と違い『見えない学力』をつけてやるのが授業における2つ目の指導の土台だからです。見えない学力とは記号研では①集中力②持続力③計画力の3つを指します。①の集中力をつけるために授業で行うこととしては「歌の速写(只管歌詞をノートに写す)」を授業にまず導入することや飽きさせないために授業を3分割にして「15分×3部構成の授業組立」にすることが考えられます。②番目の持続力をつけるためにはマラソン形式(後述)を授業形態に定期的に組み入れことが考えられます。③の計画力をつけるためには課題の「〆切を厳守させる」ことと「ガラス張り評価」を採用します。

「速写」は「ガラス張り評価」において「歌の速写が授業点(平常点)に入る」ことを生徒に宣言することで生徒達はその現実的な意義を見だし走り出します。なおかつ比較的英語が好きな生徒達にとっても、歌を自然に覚えてしまうという副産物付きです。「強制」や「点でつること」が許されるのは、その結果しぶしぶやってみた時、生徒自身が「楽しい」「自分のためになる」と思える実践であることが条件だと思います。)

②でのマラソン形式については詳しくは後述するとして、「たまたまある時間だけ珍しく授業に参加した」というのではダメで、それを継続させるように意図的に授業を組み立てるということです。マラソン形式はまだクラスが学習集団として機能していないときでもそれが可能になりうる唯一の授業形態だと思います。

③での授業において計画力をつけることは進学校でも難しいことだと思いますが、その武器である「ガラス張り評価」に関しては学校のレベルに関係なく有効かつ本来不可欠なことだと思います。生徒が何をどれだけ頑張れば良いのかを知り自分で選択する、つまり「自分の通知票は自分が自分につけた点数」であることの自覚を生徒達に促すことが、

授業における計画力の第一歩だと思うからです。私はテスト前も同じ理由で、テスト内容を公開し（別に問題そのまま教える訳ではありません。）、その上で何点とりたければ、何と何を勉強してくる必要があるのかを生徒に考えさせ計画を立てさせてからテスト勉強をしてもらいます。またマラソン形式ではあらかじめ期日を決めることで、一日何枚プリントをやれば終わるのだとかのもっと具体的な計画を立てさせる機会も与えています。もっとも「どのくらいの間にどのくらいの勉強をするかの計画をたてる時は、その結果どのくらいの学力が自分につくのかという見通しが立つこと」が大学受験を考えた場合中堅校以上の学校の生徒達には本当は大切なのですが、私の生徒達はただ仲間と競争しながら、あるいは協力しながら課題を終わらすことのみ意識は集中してしまっているようです。

2-2 分かる/分からない・出来る/出来ない

英語は本来「分かる・分からない」の科目の側面の他に、「出来る・出来ない」の実技科目の側面も持っています。そして「英文の読み方指導」としてはまず「出来る・出来ない」に焦点を合わせる必要があります。次にそこから「分かる」を経験させるようになります。学力を転移させるのためです。「出来る」から「分かる」を経験して始めて学力は転移します。「わかる・わからない」の科目の場合「発問中心の授業」ということになりますが、「出来る・出来ない」を意識した場合は「指示中心」です。そのためまずあらかじめ英文に記号付けしてあるプリントで『連結詞で単文ごとに分け、動詞を見つけて、動詞の左側が主語であることに慣れる練習をすること』を「訳してみなさい。」というように言葉を換えて指示します。自力で必ず「できる」ということを実感させます。そして「量」と「記号」が「分かる」を保障します。「量」を要求する事によって、連結詞の存在意味、動詞の位置、主語の位置が、句の固まりが「分かる」ようになるのです。そしてこの時はじめて学力は転移する力を持つのです。初めは記号だらけの英文も「量」をこなすことによって段々と白文に近い状態に記号を外していきます。実践は前進していかないとダメです。このことから私は教科書の英文を1回訳して、その英文の「和訳を知っただけ」で満足されては、その1時間はあまり意味がないと思っています。同じ構文・単語を使った英文に次に会うのはいつになるか分からないからです。単純な「量」の問題です。量が足りないのです。それでは学力の転移が望めません。「出来る・出来ない」の科目なら体育の逆上がりの練習のように量をこなす事がポイントなのです。今の勤務校では「1つの英文を1回訳してそれで終わり、次の英文に進む授業」（訳読式）であるならば1コマで2ページ位一気に進まなくては「量」が足りないように思えてきました。しかしそれでは音読練習との兼ね合いでうまく授業が組み立てられません。「読める・読めない」も転移させなくてはいけない英語力です。そこで私はこれに代わる方法として「1ページの同じ英文を10回読む授業」を現在では採用しています。（音楽のアルトリコーダーは同じ曲を何度も何度も練習してふけるようになり、音が出るようになりました。次の曲を練習するときは1曲目より少し楽にふける自分に気が付きました。同じ「出来る・出来ない」の特性を持つ英語学

習も同じ理屈が言えるはずです。)

定期的にマラソン形式による英文和訳の「量の指導」(上記の1コマ2ページをこなす授業)も行っていますが、その他の一斉授業の場合は、同じ英文を使った音読での「量の指導」を意識して行っています。音読の時間を作るために各レッスン最初の授業で全訳とワンレッスン分のプリント(フレーズ番号付けプリント・資料参照)を配り冊子にさせて家庭学習にまわし、(実際にはレッスン最初の一コマ、予習の時間に与えています)授業では軽く扱います。音読のために15分位の時間を作れば十分です。

一度訳せた英文、意味の分かった英文、訳し方が分かった英文を何度も読むことで、それが転移する学力となることは國弘正雄氏の文献からも明らかです。

記号研の実践には「学力の転移」と「わからなさの構造」という考えが根本に流れています。記号研にとって『学力』とは「転移すべきもの」でありそれは「目に見えない学力」を土台にしたものであり、対象生徒の「わからなさの構造」を理解した上での授業実践で始めて身につけさせることのできるものです。

「学力の転移」とは例えば「あらかじめ記号付けされた英文を読んでいるうちに自分で他の英文を記号付けしながら読めるようになり、最終的には記号なしでも読めるようになること」です。「典型教材の音読練習が未知の英文を読む際にも応用できること」です。それにはやはり「量」を問題にせざるをえないのです。

『与えられたことだけを与えられたようにしか出来ない人間を育てるのは「教育」ではなく単なる「詰め込み」にすぎない。「転移する学力」を育てて始めて教育したと言えるのだ。』と寺島先生がよくおっしゃっていました。また以下の文も私の中では非常に大きな意味を持っています。

「分かる」「できる」は英語教育において非常に大切なテーマです。なぜならそれは平和教育の土台だからです。いくら平和教材を使って授業をしても、日々の授業が「わかった」「できた」という実感を持つものでなければ、私たちの実践は逆に平和教育の土台を一步一步掘り崩していることになるからです。平和教育の困難点は「どっちみち努力しても、出来ないものはできないのだ」という現実主義・順応主義・絶望感にあります。このことを忘れてはいけません。たとえ教科書教材が「平和」を扱っていないとしてもその教材を日々の授業で「わかる」ように「できる」ように教えることが平和教育につながっているからです。(『英語にとって学力とは何か』)

2-3 マラソン形式について

マラソン形式とは、例えばプリントで課題をやらせる場合「1枚目のプリントが終わったら、教師に見せに来させ、全て正解した場合のみその課題を受理して次の課題を渡す・・・また2枚目が終わったら、持ってきて3枚目を受けとる・・・」という個別学習形式です。授業が不成立な状態でも、この形式で、クラスの上位者が好きなだけ先に進め

ることを保障し、本当に低学力な生徒を見つけて援助の手を差し伸べることが出来れば（放課後、休み時間を含めて）中間層のやればできるのにただやらない生徒は放っておいても大丈夫です。ガラス張り評価さえきちんとしてあれば、大抵は遅れて走り出し、もともと頭がいいのですから追いつくことも可能でしょう。ただしこの場合も締切は守らせます。そうやって最初の日から計画通りやらないと終わらないことを学ばせるのです。万が一そのレッスンでは一枚もやらなくても、次のレッスンの時はきっと走りだします。それでもやらない生徒なら多分一斉授業でも、授業に参加してないでしょうから、同じ事です。マラソン形式のポイントはクラスの両端をつかむ事にあります。これが授業不成立のクラスを学習集団に変えていく大きな第一歩です。マラソン形式には教師の肉体的疲労というものが付いてきます。また、見た目、教室内の立ち歩き状態と同じ状況になりますから、そのことを我慢できない性格の教師には不向きです。逆に1対1なるチャンスですので良い関係を築くこともできます。1対1だとピアスなど生徒指導も素直に聞き入れる場合が多いです。並んでいる時の私語をどうするか、あまり長い列に成らないようにするにはどうしたら良いのかなど各自工夫しなければならない問題点も残ります。そのためあらかじめ数枚配っておき、添削は後でまとめてやり、期間巡視をしながら個別指導を行う先生も多いようです。

2-4 記号付けについて

実は私が「寺島の記号」を最初に知ったのは大学生の時で、教師2年目で再び興味を持ち始めるまで記号は使っていませんでしたから3年間は知っていても使う気がしなかったという方が正しいかもしれません。理由は「英文にごちゃごちゃ印をつけるのはイヤ」という事でした。しかしそれは私たちが英語が比較的得意である証拠です。これがフランス語だったらどうでしょう。以下の仏文を訳しなさい。

1

Paul: Vous aimez ces tableaux, Mademoiselle?

Yuri: Oui, surtout celui-ci. Je trouve ces couleurs splendides.

Paul: Moi, je prefer celui-la, a cote. Il est puissant.

Yuri: C'est vrai. Oh, j'aimerais avoir un tableau comme ca chez moi.

2 Je trouve qu'il est assez banal.

おそらく記号がついていなければ、お手上げです。複文は単文+単文だから、連結詞（接続詞・関係詞・疑問詞）を□で囲って単文ごとに分けて訳します。動詞が見つかれば、動詞は（まる）で囲みます。その前が主語ですから、あとは言葉のかたまり（前置詞句）を[]でくくってあげさえすれば、いとも簡単に訳せてしまうのです。

～実際にやってみましょう～ <プリント配布>

ここで記号研のプリントには必ず右側に単語のヒントがついていることに注目して下さい。単語の辞書引きは内容把握の際には必要ありません。というより、害です。このフランス語を読むときいちいち辞書引いていたら、読む気はどんどん失せてしまいませんか？そんなことより、どんどん内容に引き込まれながら、量を読んだ方がいいに決まっています。

また記号研の記号は、「はずすためにつける」が基本です。段階的に記号をはずしていき、自分で難しい文だけ記号をつけて読み進めるようにしていきます。現在は連結詞だけ記号が付いています。

<始めて追試をされる方に一言>

B5版で、ヒントは必ず英文の右側、3センテンス位を目安で作るのが、成功のコツです。ほとんどの生徒が複数枚1コマで終わらせられるように仕組んで下さい。

2-5 音読練習の仕方

記号研での音読指導の基本的な考えは、『英文の読みの練習は、個々の音の発音よりも文の強勢リズムを中心に置き、音の化学変化に慣れさせることにある』ということです。

そのため記号研には「リズム読み」という練習方法があります。歌の指導から始まりましたが、典型教材（チャップリン「独裁者」及び「I Have A Dream」）の実践報告を経て教科書の文章でも最近では報告がされています。（しかし読むに値しない教科書英文よりも上記の素晴らしいスピーチなどで練習した方が「リズム読み」→「表現読み」が自然に出来て良いと言うのが寺島先生の主張です。）あらかじめ教師がテープを何度も聞いて作ったリズム読み用のプリントを用います。そして強勢マークが入ったところでボールペンをたたきながら、声をそろえて読みます。4人組を作り、テストをするようにすると、仲間と声をそろえるために何度も何度も練習することとなるので効果があります（ビデオ参照・資料は右側）。このテストをマラソン形式で行う事によって、初めはなかなかうまく仲間と揃えなかったのが、だんだんと短い時間でそろえられるようになり、「上達を実感できる」実践にもなりえます。また歌教材は、このリズム読みがうまく出来さえすれば、すぐ歌えるようになるので、リズム読みには最適な教材です。

～実際にやってみましょう～ <プリント配布>

また高校のリーディングで毎回の授業に有効な音読練習に、もう一つ「シャドウ・リーディング」があると思います。教科書テープを使ってやるのも良いでしょうが、その前に隣の人・後ろの人・クロスの人とペアになって、じゃんけんをして勝った方が先に読んで、負けた方が0.1秒遅れて読むなどすると結構盛り上がります。同じ英文を1時間に何度も読ませたければ、このシャドウ・リーディングはお勧めです。ペア練習の後、教科書テープで仕上げ、最後は声に出さないで心の中だけの「シャドウイング」をさせると1

5分位の練習でも自分の上達が自分で分かる（心の中だったらシャドウイングが結構出来るので）ようで、継続の良い動機付けに成っています。ちなみにシャドウ・リーディングとシャドウイングの違いは、前者はテキストを見ながら行うという事です。記号研では「合わせ読み」と読んでいます。

量（回数）を保障することが大切ですが、授業だけでは間に合いません。國弘正雄氏は100回と言いますが、それは無理としても20回は読ませたいものです。富山の高校の海木先生の「音読しおり」と「音読 Tape」はそういった意味で素晴らしいアイデアだと思います。「しおり」に関して最近では面倒なので教科書のはしに○印や☆印を書かせて、それを塗りつぶすようにしている先生も私の近くにはいます。（『法則化運動』では良く知られたアイデアのようです。）

2-6 自己表現と和文英訳

自己表現の実践と言えば、私は中嶋先生の卒業文集が目標です。しかし、先生がその文集作成のために生徒を育ててきたことを思うと、卒業文集のための訓練をどうシラバスに組み入れるかがかなり問題です。ライティングの授業を使って、最後に卒業文集を作ること为目标に授業を組み立てみました。統一テストで教科書中心の授業、しかも2単位です。寺島先生のアドバイスのもと、新しいプリントを作りました。授業では教科書をプリント化したものを使います。（資料参照）一つのレッスンにB4版2枚です。一枚目は教科書の例文（平均8題）、2枚目は教科書の英訳問題（平均8題）です。付属のFDを使って一枚30分くらいで作れます。一つの例文につきプリントでは以下のように4段方式を採用します。

- 1 段目 教科書の例文の日本語そのまま
- 2 段目 英訳しやすい日本語へ書き換えたもの（使う構文がすぐ分かる日本語）
- 3 段目 記号のみ（日本語の語句並べ替え用・指導書や教師の模範訳をたよりに）
- 4 段目 記号のみ（英訳用・ただし前置詞はなるべくあらかじめ書いておく。）

例)

- ① 私達の学校の校則は厳しいと（思う）。
- ② 私は〔私達の学校の規則は厳しい〕と（思う）。
- ③ 私は（思う）と〔私達の学校の校則○ 厳しい〕
- ④ （ ） [（ ）]

この形式で8題分をB4 1枚に作ります。そして最後に右端に出来るだけ多くの単語のヒントを書いておきます。これにより生徒がどこでつまずくかが解明されると思うからです。上記のようなプリントが出来たらそれを使っての授業を行います。前半の4題は一斉

授業で、3段目の日本語の並べ替えまで一緒にやり、時間を与えて英訳させます。黒板に4名に書かせて黒板上で添削します。後半の4題は3段目から生徒自身にやらせます。早い生徒は黒板で添削している時に、すでに後半の4題をやっていますが、時間を15分位にして全員に提出させます。

残り時間は教科書のその他の文法問題を解いて終わります。それと教科書は文法項目ごとにまとまっているので、その解説も必要に応じて前半の一斉指導のどこかでポイントを板書して説明します。

マンネリを防ぐためにもマラソン形式等の個別指導がかかせません。特に、英作指導はやはり個別の添削が保障されていないと、生徒もやる気が出ない気がします。赤ペンを入れて返すと生徒が「先生偉いよな。ほんこだけの先生ばかりだもんな」と口にしたりします。過去を振り返りドキッとさせられます。

添削についてですが一人一人に赤ペンを入れるのは大変ですが、このプリントだと、使う単語も構文も明確なので赤ペンは3段目の日本語の並べ替えに入れるだけで十分な場合が多く楽です。またその方法ですが、私は授業の15分くらいは生徒を一人一人教卓に呼んで、1日10名位はそこで添削指導を生徒本人の前でしてあげるときがよくあります。生徒は分かるようになるし、放課後の添削も10人分減るのでとても楽です。生徒も1対1だととても素直です。また一日10名だと席に戻っていった時に周りの生徒に質問される形になるので、ここに一班4名の班が存在すればもっといいかもしれません。添削は大変ですがその労力に対して必ず「授業がやりやすくなる」といった **Reward** があります。

もちろん問題点もあります。それは生徒自身も気づき始めていることですが、「英作文は2段目を3段目、3段目を4段目に変えるは難しくないけど、1段目を2段目に変えるのはすごく難しく自分ではできない。」ということです。

まさにその通りで、日本文を見てどの構文を使うかを決めることが難しいのです。1段目を2段目に変えるということは、「与えられた日本文を自分の知っている単語と構文を使って英訳すること」につながります。これが出来れば「自分の書いた日本文を自分の知っている単語と構文を使って英訳することができる」ようにもなっていくだろうし卒業文集も素晴らしいものが出来上がるはずで。記号研では『複文を単文に分解してたくさん量の英文を書く』ことを自己表現指導の中心に据えています。本当は教科書の複文も全て単文に分解して英作させてみたいのですが、他の先生を説得する勇気が私にはまだ当初ありませんでした。しかし次年度は是非挑戦したいです。

教科書指導の合い間に普段出来ないこの練習をすべく『コボちゃん英作文』を始めました（工藤順一『国語の出来る子どもを育てる』参照）。「コボちゃん作文」は小学校国語科の実践で、4コマ漫画を使って（従来の吹き出しを使うのではなく）きちんとした説明文を書かせる実践です。この「生徒が書いた文章」を生徒自身によって単文に書き換えさせ、日本語の並べ替えをさせたのち、英訳させます。『自力で英語に出来ないときや、並べ替え

の段階でつまずいたときは、最初の日本語そのものを言い換えなさい』という指示で行いました。「動詞に○をつけさせ、○が一つになるように」との指示が有効です。思っていたより生徒達の食いつきが良く、日本語言い換えのとても良い訓練になるように思います。友達同士で英文を見せあう光景も普通になりつつあります。ただしもし教科書のきちんとした日本語で単文に分ける練習がしてあればこの実践はもっと意味が出てくるはずです。なぜなら「与えられた日本語を自分の構文・単語で英訳する」ことなしに「自分で書いた下手な日本語を英訳する」力は付きにくいからです。さらにその後の実践としては授業の感想や、映画の感想文を日本語で書かせた後に、それを英文にすること等が考えられます。(ちなみに英文からいきなり書いた場合はそれ以上の量の日本語解説をつけさせるのが、寺島先生の大学でのやり方です。)

また私の学校ではなかなか教科書を離れられないのが現状ですが、私のように内容のない教科書の細切れの日本語を英訳するのではなく、もっと内容のある物語などで和文英訳練習をしないとダメだといつも寺島先生には指摘されています。生徒が自分でやって楽しいと思えなくては学力としての定着が遅いからです。「ごんぎつね」「ナウシカ」「地雷の代わりに花を」など中間教材の発掘が急がれています。

2-7 構造読み・主題読み

記号研の最近のテーマは文レベルから、文章レベルに移行しています。会員の多くが転勤をし、中堅校に移ったことが大きな要因だと思います。大西忠治氏の「科学的読み研究会」の構造読みと主題読みを英文にも適用出来るかということがその実践の中心テーマです。構造読みそのものは生徒達も主体的にとりくめる実践なのですが、その後教師がどうやって、それをもとに討論をもっていくか、「2つ目の指導」が非常に難しいです。私は今のところ、構造読みの後、個人で考えを「作文用紙」に書いてもらい、教師がいくつかを発表する形で終結しています。

ちなみに構造読みとは、全訳が終わった後に、「全体を4つ(3つ)に分けなさい」という指示でグループで決めさせ、班ごとに発表させ、討論させるというものです。物語的文章は 導入・展開・山場・終結からなり、説明的文章は、序論・本論・結論からなるという前提です。学期に一回位は実践してみたいものです。

3 大学での実践を高校で追試する

記号研の長である寺島先生は現在大学の教員であるので、最近の寺島先生の実践は全て大学生に対するものです。しかしながら多くのそれは、高校・中学での追試報告から分かるように、大学の中だけにとどまる実践ではありません。今後追試してみたいあるいは

してみたものをいくつか挙げたいと思います。

(1) 歌のレポート

授業を通して歌のリズム読みに慣れた後、夏休みなどの宿題として自分の好きな曲にリズム読み記号を付け、解説・自分なりの訳・感想を添えて提出させます。リズム読み記号をつけるには、各自生徒は何度もその曲を聞くこととなり、また声を出すことになっているはずですが。最近中堅高校での実践報告もあり成功を収めています。

(2) スピーチ

原稿（単文での英作文）をグループで相互添削させてから、メモを見ながら単文での発表。当面の間は評価はストップウォッチによる英語発話実時間だそうです。（個人的には、スピーチは相手に伝わってこそ意味があるので、聞き手にどれだけ伝わったかを点数付けさせるのがいいと思うのですが。）

(3) 世界人権宣言ロックコンサート

寺島先生は1994年から国際理解教育の授業実践として、上記のビデオと自主編集教材を使って人権についての授業を行っています。

最初の30分・・・毎回6条人権宣言を解説

次の30分・・・学生レポートへのコメント

残りの30分・・・ワールド・ツアーのビデオと解説

(4) 平和

高校・大学での「独裁者」「I have a dream」の実践報告はされていましたが、「I have a dream」に関して、リズム読み指導の後「合わせ読み」「表現読み」への移行は是非追試したいものです。あの長い演説はリズム読み練習さえ出来れば、表現読みへの移行は難しくないので、また量的に他の英文を読むときの「学力の転移」も十分に期待できるそうです。また記号研ではアメリカを教える時、公民権運動とベトナム戦争を伝えるべきであるとして、その資料も豊富にそろえてあります。大学での寺島先生の実践報告をもとに、高校・中学での追試を進めています。中でもベトナム戦争を語る際、映画『Dear America』を使った授業は生徒の心に響くことは間違いありません。この映画はベトナムへ行った若者達が家族にあてた手紙の朗読と実映像そしてロック音楽によるドキュメンタリー仕立ての映画です。テキストも寺島先生が大学生用に編集したものがあります。

(5) 環境

新英研ではおなじみの「ナウシカ」を使つての導入の他に、映画『Burning Season』を使つての導入などをおこなっているようで、私も使わせて頂いています。とにかく映像

資料・音声資料に関しての寺島先生の収集力は高校・中学の教師にとっては「ありがたい」の一言です。それらを使ってどういう授業を私たちが作れるかは別としても、その映像資料を教えて頂くだけでも、授業は変わってきます。もちろん実践の方も、**Think Globally Act Locally** という国際理解教育の根本原理を貫いて「足下の環境問題」に目を向けさせるような「長良川河口堰問題」についての実践報告もありました。

国際理解教育の実践については是非『国際理解教育の歩き方』（あすなる社）という本を読んで頂きたく思います。寺島先生の人柄が伝わってくる大変読みやすくおもしろい本だと思います。

これらの実践は全て寺島先生の大学での実践ですが、高校・中学でも追試可能、追試しなくなるようなものばかりだと思います。

4 さいごに

マカレンコの『教育詩』を読んで頭から離れず、教師としての私の座右の銘となっている台詞があります。それは『集団は前進し続けなくてはいけない』というものです。英語の授業も「クラス集団」で行う以上、「発達段階を意識したシラバス作り」が大切だと思います。中嶋先生の本にも3年間を通してのシラバス作りの重要性が書かれていましたが、まさにその通りだと日々痛感しています。学校の英語科全体での3年間のシラバス作りを考えないうちは授業において英語の『学力』をつけるのは困難です。

寺島先生には「本を読むと、その人が今現在必要としていることだけ頭に残る。」と言うことも教わりました。寺島先生の『英語にとって学力とは何か』は読み返す度に『こんなこと書いてあったかな?』と思います。今回の私のレポートが少しでも多くの方の頭に残ってくれることを期待してこのレポートを閉じたいと思います。

・・・記号研はあと8年で解散です。それまでに新英研の熱心な先生方にも、もっとよくその『姿勢』を知って頂きたいと思い、今回は私が『記号研』から学んだことを中心に発表させて頂きました。またここには書きませんでした。生徒指導、授業規律など授業以前の問題についても積極的に議論を行っていますので興味のある方は是非記号研の公式HPにアクセスしてみてください。また教材は『教材ネットワーク』というものを会員間で共用出来る状態になっていますので興味のある方は問い合わせを見て下さい。今回このような機会を与えて頂き深く感謝しています。・・・

<http://www2c.airnet.ne.jp/mths/>

茨城県立藤代紫水高等学校 寺田義弘

参考文献

- 寺島隆吉：『英語にとって学力とは何か』『英語にとって授業とは何か』
『シリーズ授業の工夫：記号付け入門1－5』（以上三友社出版）
『英語音声への挑戦』全6巻
『英語にとって文法とは何か』『英語にとって音声とは何か』
『国際理解の歩き方』（あすなろ社・三友社出版）
- 寺島美紀子：『英語学力への挑戦』『英語授業への挑戦』（三友社）
『ロックで読むアメリカ』（近代文藝）
- 中嶋洋一：『英語好きにする授業マネジメント30の技』
『英語のディベート授業30の技』（明治図書）
- 海木幸登：『英語の授業作りを楽しむ』（三友社）
- 大西忠治：『大西忠治著作集』（明治図書）
- マカレンコ：『教育詩』（明治図書）
- 工藤順一：『国語のできる子どもを育てる』（講談社現代新書）
- 國弘正雄：『英語の話し方』（サイマル出版）

～参考までに～

寺田リーディング授業組立（4単位）

- 1 小テスト（7分）
- 2 歌（3分）
- 3 教科書の解説（20分）
- 4 音読（15分）
- 5 歌（3分）

歌は学期に4曲、小テストあり。テストごとに『世界の国々から』。導入にビデオ（3コマ）を見せる時が多い。レッスンによって音読テストを実施したり構造読みをさせる。

寺田ライティング授業組立（2単位）

- 1 歌（2分）
- 2 速写（5分）
- 3 プリント（15＋15）
- 4 教科書の文法問題（10分）
- 5 歌（2分）

教科書5レッスン（10コマ）で「コボちゃん作文」を1回実施。2学期中間後、4時間パソコン教室を実施。その後「卒業文集」作成開始。昨年度継続していたリレーノート、教科書の自己表現、教科通信は今年度は実施していない。雑務に追われてサボらせてもらっている。